



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	シングルマザーの健康とエイジェンシー：子どもへの追加的なケアに着目して〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	江, 楠
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第16310号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95294
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	JIANG_Nan_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学） 氏名：江 楠

主査 准教授 佐々木 宏
審査委員 副査 教授 駒川 智子
副査 准教授 保田 真希（北翔大学短期大学部）
副査 名誉教授 松本 伊智朗

学位論文題名

シングルマザーの健康とエイジェンシー
—子どもへの追加的なケアに着目して—

本論文は、シングルマザー、すなわち母子世帯の母親が生活を切り盛りし、ケアを遂行する過程において、どのようにエイジェンシーを行使しているのか（主体的な行動や選択をしているのか）について、母親の心身の健康状態と子どもへの追加的なケアに着目して論じたものである。本論文における「追加的なケア」とは、たとえば子どもが発達障害を持つ、心身の状態に何らかの問題がある、不登校であるといった場合に、基本的な育児に関わるケアに加えて必要となる、特定のニーズや状況に応じたケアのことである。

これまでのシングルマザーや母子世帯研究では、母親が直面する経済的困難や、就労と育児の両立の難しさが指摘されてきた。また、母子世帯は経済的資源ほかの生活を支える諸資源が不足していること、そのことが母親のエイジェンシーの行使を制約していることも明らかにされている。本論文の大きな特徴は、これらの先行研究の知見をふまえながら、母親の心身の健康状態と子どもへの追加的なケアの有無に焦点をあて、生活や子育ての困難を明らかにすることを研究目的としたことである。いうまでもなく健康状態はケア遂行能力を左右し、追加的なケアの有無はケア負担の多寡や複雑さに関わる条件である。これらのことに着目した本論文は、母子世帯の生活の現実と母親のエイジェンシーのあり方を、今までの研究以上に丁寧かつ具体的に検討する試みといえる。

上記の研究目的を達成するために、本論文では二種類の調査データを使った分析が行われている。一つ目は、北海道保健福祉部子ども未来推進局子ども子育て支援課が北海道大学大学院教育学研究院に委託して、2017 年に実施した「北海道ひとり親家庭生活実態調査」

のデータ（「母子のみ世帯」1558 世帯分）の二次分析である。二つ目は本論文の著者自身が2022 年に実施した、未成年の子どもを育てる、ひとり親世帯の母親 22 名を対象にした聞き取り調査の結果分析である。後者の調査では、ひとり親になる前後の生活状況や、現在受けている支援者や公的制度からのサポートに対する意識等が聞き取られている。

「北海道ひとり親家庭生活実態調査」のデータの二次分析では、北海道の母子世帯の生活の基本的な特徴、母親の健康状態、ソーシャルサポートの利用状況について確認した。この分析においては、社会経済不利を抱えた母親の中には心身の不調を経験する者、また親族や公的機関からのサポートを十分に受けられず孤立する者が少なからずいることが明らかにされている。

著者が実施した聞き取り調査の結果分析では、調査対象者を母親の健康状態と追加的ケアの有無の 2 点によって、4 つのグループに分類したうえで、日常的な生活や子育て、また私的あるいは公的なサポートの利用状況も含め困難に直面した際の対応をめぐる各グループのエイジェンシーの行使の比較検討が行われている。その結果、母子世帯が直面する困難や不利の複合性に加え、母親の健康状態や追加的なケア負担がエイジェンシーの行使に負の影響を与えていることを明らかにしている。この負の影響は、親族や公的機関からのサポートによっても、十分に緩和されていないことも調査結果の分析で明らかとなっている。

以上の知見をもとに、本論文では母子世帯の母親による生活や子育てをめぐるエイジェンシー行使の困難とその背景にある構造を整理し、結論としている。

審査委員会が評価した本論文の意義は以下の点である。第一は、母親の健康状態と追加的ケアの有無に着目することにより、エイジェンシーの行使において最も困難が予想される母親の生活や子育てのあり方を明らかにした点である。このことは、ひとり親世帯についての社会福祉研究に大きく寄与する成果といえる。第二は、量的調査と質的調査を組み合わせた分析によって、上記の研究成果が説得力のある形で示されている点である。第三は、質的調査の丁寧な分析によって、心身に不調を抱えながら追加的なケアを要する子どもを育てることの困難と、その困難を前にした母親の葛藤や格闘の実際を示すことに成功している点である。本論文は不利を抱えた当事者のふるまいや経験を対象にした調査研究として良質なものと見える。

審査においては、母子世帯になる前後の状況の違いに関するより丁寧な分析、また、得られた知見をひとり親世帯研究だけでなく貧困研究やケア論等にも関連付けて考察する必要性も指摘されたが、これらのことは著者の研究の今後の課題といえる。

よって、審査委員会は著者が北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。

以上